

## 《資料紹介》 森政三コレクション 首里城二階御殿古写真

上江洲安亭<sup>1</sup>

### I. はじめに

森政三コレクション所蔵の図面・古写真等の紹介を過年度より継続して行っているが、今回は、首里城内の二階御殿(ニーケーウドゥン)を撮影した写真について紹介したい。二階御殿の古写真は10枚あり、正殿よりも撮影数は多い。森政三が関心を持った視点が垣間見え興味深い。本稿では、二階御殿の歴史についても触れたうえで紹介を行う。

### II. 二階御殿の歴史

二階御殿の創建に関する記述は『球陽』等の正史にも残っていない。久手堅憲夫氏は『異本王代記』を根拠として尚穆王14年(1765)に創建としている<sup>2</sup>。但し、『王代記』系統の写本は出典が不明確なものが多く、他に根拠となる史料も見当たらない。

『球陽』巻十五 尚穆王十四年(1765)の項に「十四年春三月、内府厨房を以て、層楼に改造す。王、其の厨房を以て、兩層の楼に改作し、而して其の楼下は、仍、厨房と為すことを命ず。向克寛大山里之子親雲上朝堯をして、之れが董率と為らしめて之れを成す。」とある<sup>3</sup>。「内府厨房」を「兩層の楼に改作」とあり、1765年に御内原の建物を改築して二階建としたことがうかがえる。ただ「厨房」とあるので、御内原の寄満を二階建に増築したということだと思われる。また『異本王代記』の二階御殿創建年と重なっていることから、『異本王代記』の筆者は『球陽』の「兩層の楼」という記述から「内府厨房」を寄満ではなく二階御殿と認識したのではないだろうか。傍証する他の史料がないため、今後の課題と思われる。

二階御殿は、北方の御内原側から見ると二階建の建物となっていることから、二階御殿と呼称したものと思われる。建物の東方、御内原側には石階段を備えた瓦葺の屋門(ヤージョー)もしつらえている。御内原南縁の崖を活かして北側は二階建だが、南側の二階部分は崖上に庭園と物見台を付した床之間や広間がある建物となっている。

この二階御殿と呼称された建物は先述の『異本王代記』に1765年創建とあるようだが、正殿後方の東南側の同じ敷地には、それ以前から建物があった。根拠として、二階

<sup>1</sup> 一般財団法人 沖縄美ら島財団 事業部 首里城事業課 副参事

<sup>2</sup> 久手堅憲夫『首里の地名—その由来と縁起—』(第一書房 2000年10月)46頁。

<sup>3</sup> 『球陽』読み下し編(角川書店 1974年3月)358頁。

御殿周辺では、15 世紀前半頃の中国陶磁や、大量の天目茶碗、ガラス小玉製品等が火災等で破損し、石畳の下層の造成土に一括して廃棄したと思われるかたちで出土している。出土遺物の年代から造成が行われた 15 世紀頃に石畳や建物が建設されていたことが発掘調査で明らかになっている<sup>4</sup>。古琉球期（中世相当期）に遡り、呼称は不明だが、二階御殿地区には貴重な中国陶磁や天目茶碗等の祭祀儀礼道具を保管していた重要な施設が正殿に近接してあったものと思われる。

また、近世琉球末期の二階御殿は、『球陽』巻二十二 尚泰二十七年（1874）の項に「本年、二階御殿、其の窄狭なるに因り、南方の石垣を改築して其の殿を造り広む。」とあり<sup>5</sup>、改築がなされたようである。

義村家の『家譜』には、同治 5 年（1866）生まれの義村朝義（向明德）が、光緒 3 年（1877）に、「御同學となり、毎日二階殿に出勤す」とある<sup>6</sup>。尚泰王次男の尚寅は義村朝義と同じ 1866 年生まれである。数えて 12 歳の朝義は尚寅の御学友として二階殿に毎日通ったものと思われる。元服前の少年であるが男性が正殿後方のエリアである二階御殿に毎日通学している。朝義は、継世門から美福門に登り、左に折れて、寄満の御中門前を通り、二階御殿の瓦葺屋門をくぐり、二階御殿の庭園に面した広間で尚寅と勉学に励んだのではないだろうか。また講義を行うにあたっては師匠となる成人男性も朝義と同じルートで二階御殿に通勤したと思われる。王子の御学友や師匠の通勤の痕跡から、女官で運営される御内原の範囲を考えるうえでも興味深い記述である。

琉球処分後、近代になると、熊本鎮台分遣隊は、病室として使用したようであり、分遣隊が撤退後、運営開始期は不明であるが城内食堂として使用された。その後、周知の通り、1945（昭和 20）年の沖縄戦で焼失した<sup>7</sup>。

### Ⅲ. 森政三コレクションの首里城二階御殿古写真

二階御殿の御内原側（北面）の画像を見ると（写真 1）、建物名称の由来の通り、二階建となっている。ガラス窓となっているが、撮影時には、その多くが破損していた。写真 2・3・4 は、瓦葺屋門を東側から撮影した写真（写真 2・3）と西側から撮影した写真（写真 4）となっている。

写真 5 は、二階御殿よりも西側から、黄金御殿の庭園、石階段、二階御殿の部分が撮影されている、撮影時間が午後だったのであろうか、西日の影響で撮影者の影も写っている。

<sup>4</sup> 『首里城跡 - 二階殿地区発掘調査報告書 - 』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年 3 月）

<sup>5</sup> 『球陽』読み下し編（角川書店 1974 年 3 月）666 頁。

<sup>6</sup> 『那覇市史 家譜資料（三）首里系』（那覇市企画部市史編纂室 1982 年 1 月）397 頁。

<sup>7</sup> 2 と同じ。

写真6・7は、二階御殿南側の庭園を撮影している。庭園内の芝地に石柱が五基並んでいる。庭園の外側のおそらく苧銘御嶽の高木が写っているが、写真6によると庭園内に芝以外の植栽は行われていない。写真7の城壁向き（南西向き）の構図からは城壁手前に並行して花壇のように石垣が積み上げられ、ソテツが植えられているのみで、簡素な構成となっている。印象的な石柱を並べた庭園については、鹿児島県南九州市知覧町郡の武家屋敷の平山亮一氏庭園<sup>8</sup>に類似事例がある。平山亮一氏庭園では盆栽等を鑑賞するためにしつらえたと伝えられているようである。二階御殿の石柱も類似の利用をしていたのかは、琉球国内の庭園の類似事例との比較考察も含めて今後の課題である。画面の奥には二階御殿の物見台と、物見台に登る階段が見える。この写真6は、鎌倉芳太郎撮影写真にもほぼ同じ構図の画像が残っている。

写真8・9・10は、二階御殿の物見台を撮影している。特に写真8・10の二階御殿物見台上にカメラを設置して人物が撮影された写真は珍しい。物見台の桃形に穿った石高欄や、波型の石牆等、特徴的な石造彫刻の造形が、庭園側から撮影された鎌倉古写真や写真9等より明瞭に確認できる。また写真8・9の被写体となっている人物は、森政三本人である。写真10は、和装の女性が撮影されている。モデルとして依頼して被写体としたものか、調査関係者を撮影したのかは不明である。

二階御殿を撮影した森政三旧蔵の古写真は、鎌倉芳太郎や田邊泰・巖谷不二雄が撮影した画像も含めて、今後の首里城公園の整備についても、再確認を含めて様々なかたちで活用されるものと思われる。

#### 謝辞

本稿執筆にあたり、建築家の平良啓氏に様々な助言を頂いた。記して感謝の意としたい。

---

<sup>8</sup> 南九州市 HP より参照。平山亮一氏庭園 | 鹿児島県南九州市 ([minamikyushu.lg.jp](http://minamikyushu.lg.jp))  
国指定名勝『知覧麓庭園』の「平山亮一氏庭園」は、天明年間（1781）の作庭と伝えられている。

図版



写真1 二階御殿御内原側（北面）



写真2 二階御殿家門1



写真3 二階御殿家門2



写真4 二階御殿家門3



写真5 二階御殿西側より御内原を望む



写真6 二階御殿庭園1



写真7 二階御殿庭園2



写真8 二階御殿物見台1  
撮影された人物は森政三



写真9 二階御殿物見台2  
撮影された人物は森政三



写真10 二階御殿物見台3  
和服の婦人が撮影されている